



——獅士堂の女頭梁が、東の辰ノ神と縁談を結ぶらしい。

そんな話が、長月に入る頃には組の内だけではなく、シマの町中を歩いても囁きが聴こえるようになっていた。

獅士堂屋敷では、当番で数班に分かれて野菜などの食糧品の買い出しに出向く。季節の出物や、朝一の新鮮品などの場合によっては、商売人が獅士堂邸に持ち込むこともあるが、基本は獅士堂側から人を向かわせ購入する。そこは、堅気にいらぬ世話や手間をかけさせないという、この一家の気質の表れでもある。

だが、当番制で半月に2、3度くらいの仕事とはいえ、離れの女中、つばきはこれを面倒臭かったり感じている。ひなぎくはそうでもないのだが、そんな彼女たちは、大市場の顔馴染みの野菜売りたちから、やはり件の話題を振られていた。

「いやあ、どうなるかは、こっちも分からないんですよ。組のウチでも色々言い合っているようではあるんですけどね」

「やはり獅士堂の武俠さん方も、あの辰ノ神との縁談となると、一筋縄ではいかないか……」

「ほんと、どうなるんだろうねえ」

夫婦とみられる野菜売りの店番が、腕を組み、頬に手を当てて唸る。

「話がうまいことって、西と東の関係が良好になればいいさ。そこは少しは期待したい。しかし、これまでさんざいがみ合ってきた両家だ。果たしてうまくいくのか……」

「下手すりゃ、そこから争いがおっぱじまりかねないんじゃないかって、そういう人らも結構いるんですよ」

野菜売りの奥さんに、買い出し班の一人のひなぎくが返す。

「う～ん、それは下手したらなくはないかもですけど～」

「馬鹿ひな！ そんなことないっての！」

変なこと言うな、と隣のひなぎくの脇腹を肘でどつくつばき。話が長くなってもあまり言えることがないので、仙蓼は必要なモノが買い揃ったので、引き上げる旨を告げた。

つばきとひなぎくは、野菜売りの夫婦に元気に頭をさげて、その場をあとにした。

「つばきちゃんたち、いつも言っているが、あまり組内のことを表で話しちゃいかんよ」

「はい～、すみません～」

「でも、ここまで町の人らの間に話が浸透していると、こっちも話が避けられないのもありますよ」

そうだねえ、と仙蓼はあたりを見回す。

市場の堅気の衆は、一見していつも通りに商いをしていたり、自分たちの生活に必要な食糧を買い、そして当然それを食べて生きている。今回の獅土堂と辰ノ神の縁談話は、そこに降って湧いた微妙な空気を生じさせるモノだったといえる。

本来は、結婚話となれば、祝い事ムードにもなろうはずだ。しかし、その新郎新婦が……相交わるべき両家が、あの獅土堂と辰ノ神という二大家では、郷の民の反応も手放しにお気楽に祝福する気分にもなれないのが実情だった。

「みんな不安なんだ……。元々いがみ合っている仇敵同士が最接近して、ひとつ罷り間違えば……もしかしたら、『汀』の時代の再来かもしれないから」

仙蓼の言葉に、つばきとひなぎくが目を丸くする。

「『汀』の時代？」

「なんです～、それ～」

「ああ、二人の世代は若いから知らないか。いや、俺も両親や祖父の世代がいつも話していたのを聞いて知っているだけなんだがね」

「昔の話ですか。なんなんです？ 二大家絡みですか？」

「うん。そもそも、春花姐さまの代は、割と郷も東西のシマも安定しているだ

ろう。それは先代、二十四代目様の統治の賜物だった」

荷車を後ろから押しながら、つばきとひなぎくは聞く。

「でも、それ以前、郷は争乱の時代だったんだそうだ。切っ掛けは、よく分からない。堅気はそこら辺を忘れるくらい疲弊していた時代だったみたいだ。忘れたかった時代でもあったんだろう」

「どんくらいの期間だったんですか？」

「なんでも、十三代頭梁からの十五年、だったかな」

「あれ～、何代とびました～っ」

「え、安定の治政が二十四代目様だから……、十五年で十人、頭梁が代替わりしたんですか!？」

それは、想像するに空恐ろしい。

一代の頭が続いたのが、一年と少しの期間が続いたことになる。それだけでも、どれだけ激しく争い闘い、血が流れたかが想像できた。

「二十四代目が十年でシマと郷を安定させて、春花姐さまに続きを継がせた。そして、大姐さまが今年で頭梁として治めて十三年目」

「おお～、春花姐さまさまさま～っ」

「私ですら聞いたことありますけれど、春花姐さまは在位歴代二位なんですってね」

うん、と頷く仙蓼。

「あれ、で、『汀』 ってなんなんですか？」

「字からすると～、境界線地帯が関係ありそうですよね～」

「そう。ひなぎくちゃん、冴えているね」

細い目でいつも通りにニコニコしているひなぎくを、つばきがムツと睨んだ。
「境界線地帯……あそこは昔は呼び名があったんだそうだ。それが、『汀』 という組が中心となり治めていたことで、『汀』 という通称だったという訳らしい。で、今はそう呼ばれていないだろう？ これはね……」

「え!? もしかして、その争乱の時代に抗争の被害で……」

「無くなっちゃったんですか～」

第五章 太刀の参

ガラガラとそれなりの重量の荷車が進み、市場を抜け、町沿いの道を進む。
仙蓼は言う。

「らしいね。というか、どうも両家の抗争の最前線地になって、疲弊したというのと、最終的に両家を取り持って、消滅したという話と、色々あるらしい。そこは二十年近く前のことだし、自分もよく知らないが」

「へー、そんなことがあったんだ」

「だから、ですかね〜」

「うん、だからだね。堅気のある程度歳のいった大人の人達は、かつての争乱の時代の再来を恐れている」

あ、とそこでつばきは頷く。

「そっか。組内でも男衆の間で反対と賛成で意見が分かれているって、それが一因しているのか……」

「賛成の武俠は、まだ辰ノ神の武俠とやり合っただけで日が浅く、相手に恨みの感情を持つような因縁も少ない……というのがあると、織田くんが言っていたよ」

ふむふむ一、と若女中二人は首を傾け合う。

「でも〜、反対しているのって、大姐さまがそれだけ慕われているからでもあるんですよ〜」

「おい、ひな、なんかいやらしいぞ」

「え〜、なんで〜」

いや、そこはあれだろ、とつばきはしどろもどろで言葉を濁す。そんな二人を背中に感じて、仙蓼は、ははは、と笑う。

「実際、春花姐さまが輿入れすること、それ自体に反対の男衆は多いだろうな」

「やっぱりそうですよね〜」

「ぐ……っ、そうだろうけれど……」

「でも、もし春花姐さまが結婚したりすると、それがうまく行ったとしても、問題があるよね」

「ん〜、そうですよね〜」

「ん？ なんのこと？」

ひなぎくが、ニコリとつばきを視て言う。

「雪絵お嬢さまのこと～」

それでつばきも合点が行って、ああ、と頷く。

「そっか、雪ちゃん。養子みたいなカタチで組に入ったとか言っていたけれど、もしその母親の立場の大姐さまが正式に奥方になったりしたら、子供の立場とか色々ありそうですもんね」

「その辺は、お嬢は何か言っていたりした？おっと、自分たち奉公人が立ち入ることじゃないかもな」

「そうですね～、仲良しだけれど～」

秋の空の下で荷車は進む。移り気、変わり気はなにか不義理な気がするつばき。

「うーん、確かに私らに出来ることなんてないし、立場も違うけれど.....」

はあ、と盛大に溜息をついて、つばきは頭を搔く。

「もう！ たかが結婚話でみんな面倒かかりすぎだよ！ もっとお祝い気分で気楽に行けないかなア」

「つばきちゃん～、短気は損気だよ～」

「お前が言うと妙に納得できるよな.....」

つばきたちの会話を聞きつつ、仙蓼は荷車を引く。

「でも、不安でありつつ、期待もあるんだと、市場の人も、色んな人が口にしてる。確かに、うまく運んでくれれば、もしかしたら東西はよりよい平和になるかもしれないし」

「なんか～、春花姐さま、大博奕ですね～」

「はは、なんだそりゃ。雪ちゃんたちにすれば、武俠が賭けるのは刀に命を、とか言いそうだから、気をつけろよ」

それは確かにそうだ、と仙蓼は思う。そして、この賭けがうまくいけば良いが、勿論しくじった時のリスクを考えれば、獅士堂側も辰ノ神側も手放して賛成できないのは、やはり自然なことなのだ。

「だから、ウチの幹部勢も、もうしばらくもめているんだろうなあ」

「どうなるんでしょうね～、ほんと～」

「うまく行くといいよな。姐さまも、雪ちゃんも、組も、郷も、みんな」

6

組内――獅士堂屋敷では、今日も早朝から朝日を受けて木刀を振るう侠たちが居並んでいた。その威勢ある様は、これまでとなんら変わらない武俠たちの修練の風景だった。

木刀組の道場稽古では、これまで日に二、三度の太刀合いに留めていた春花だったが、結婚話が持ち上がった（というか、自分からぶちあげたと言った方が正確ではあるが）後は、侠たちの態度がやや様変わりした。というのも、これまでよりも積極的に春花に対戦を申し込んでくるようになったのだ。

それは、今更ながらではあるとはいえ、遠まわしなアピールであり、アプローチではなかったか、と稽古を共にしている雪絵の目にも映った。当の男衆自体も、互いにそう感じてはいた。しかし、皆が皆、慕ってやまない姐さんが誰かのモノになるという、これまでありそうでなかった事態に、何かせずにはいられないのだろう。だから、こうした無骨なカタチではあるものの、行動を抑えられないのであった。

「しかし、軽やかだなあ、姐さんの刀技」

「はあ、着物がはだけないか、俺ずっと気になっていたんだけれどなあ」

「それは、一度としてなかったなあ」

「思い切って、壁に押し付けたり、あまつさえ床に押し入ったりしたら、振り向いてくれるかなあ」

「いやあ、なんだかんだで、話は進んでいるんだろう？」

「らしいな。なんか、雪ちゃんを連れて面通ししてきたとか」

「うっそ、じゃあもう、式の日取りとか相談してるんじゃ」

「結納は略式で、近いうちに済ませるとか」

「うわー、本当かよ……」

第五章 太刀の参

「よォ、黒原さんはどう思うよ？」

午前の稽古あがりに、どやどやと蒸しかえる道場を出て、日陰の井戸で汗を拭いて水で喉を潤している――そんな侠たちの一団に混じっていた黒原は、噂話に盛り上がる彼らに、そう話を振られた。黒原はつまらなさそうに返す。

「アホらしい。姐さんが誰と結婚しようが、俺の知ったことか」

その反応に、二人、三人と身を寄せて、あるいは肩に腕を回してくる。

「またまた、強がってくれるなァ。黒原だって、姐さんにはよくして目を掛けてもらって来たんだろう」

「こう、女としてみるところもあつたんじゃあ、ないかい」

「あのなあ、あの人と俺じゃあ、十ちかく歳離れてるんだぞ。一人の女つつ一より、歳の離れた親戚のお姉だろ、もはや」

しかも、馬鹿強いな。と皆はガハハと笑う。

しかし、その笑いも、尾がしょぼんとしたモノになる。

「まあ、黒原が賛成派なのは別にいいとして、しかし、現幹部連中はどう思っているんだろうな」

「あ？ 四聖の了解なしに話を進めないだろう」

暑苦しうに腕を払い、黒原が言った。

「白峰さんから、何か話を聞いているか？」

「少しな。師匠も男衆集めて下知しとけば、少しは収まるかもかもしれないのにな」

「白峰さんも、内心じゃあ納得していないんじゃないか？ あの人の姐さんが刀を振り始めた頃から見に来て来たって話じゃあないか」

「そうなあ。まあ、四聖に関していうと、師匠と、息子さんの白峰の組と、東の四聖の青刃は賛成しているそうだ。赤空とウチは、反対気味だという話らしいぜ」

へえ、と男衆がうなずき、唸り声をあげる。

「青刃が賛成ってのは、意外だな、少し」

「ああ。あそこは東の水が混じって、昔からずっと仲間内に被害が出てること

が多かったからな。恨み骨髓だという印象があるからな」

「つまりは、その逆ってことじゃねえのか？ 長く交戦状態にある組だから、あそこの頭も疲れちまってるとかよ」

ああ、と一同の中から感嘆と納得の声があがる。

「赤空は、まあ商売を広められそうだから、喜びそうな感じもするが、そうでもないんだな」

「いやあ、あそこの頭は気難しいことで有名だろ」

「案外、あの親分も、姐さんが取られるのが嫌だったりしてな」

だったら、四聖の反対派と結託して姐さんに皆で談判するか？ と男衆は本気で首をひねる。

「で、黒原のシマは、どうして反対なんだ？」

「馬あ鹿。そりゃ、あの親分が姐さんの大のファンだからに決まってるだろう。黒原はさ、親分が姐さんを見込んで倅を屋敷で鍛えてくれって、自分のシマのことよりも優先して任せてきたんだぜ」

「へー、そりゃ知らなかったな、俺」

「お前ら、くだらねえ話をしてんじゃあねえぞ！」

もとより春花の縁談自体にさほど興味を示していなかったのに加えて、自分の身の上の話にまで及んで、黒原が喝を飛ばした。そして、ふんと息を吐き、男衆に向き合う。

「シマの頭がどう思っているもよ、しかし俺の考えとしちゃあ、この話がうまく行くとは思ってねえな。いや、うまくいくならうまくいきゃ良いとは思うが」

「そりゃ、なんでだい？」

侠のひとりが、やっと話しに乗ってくれたな、と内心で思いながら訊く。

「中には俺と似た感覚でよ、奴ら東に対してそれほど恨みはねえ奴もいるだろう。しかし、相手はあの辰ノ神だぞ。いくらこの十数年、割と穏便に来たからって、それ以前の時代の奴らの負債は何も払われちゃいねえだろ。つまりよ、姐さんが良いついてって結婚しても、内部にやあわだかまりが残るってことだ」

「うむ、まあなあ。しかしな、それでこの話を機に二大家の仲が良好になれば、

第五章 太刀の参

そのわだかまりも次第になくなるかもしれん、というのが姐さん方のお考えだろう」

「姐さんのその考え方を由として、そのための結婚なら、お前らは納得できるんじゃないのかよ？」

「ぐ……っ 痛いところを突いてくるな、黒原」

反対したい感情はあるが、この縁談に含まれる可能性も、時間が経つにつれて理解してきている侠たちだった。だが、女性としての坂本春花をみる感情がうんと言わないのだ。なので、黒原の言葉に強く返すのが難しかった。

「まあ、うまく行くかどうか、行く末を見守るのもありなんじゃねえのか」

「……ああ、織田くんも同じようなことを言っていたなあ」

「織田？ ……クソ左ノかよ。あいつがなんだって？」

また別の武俠が、自分も知っていると言う。

「しかし、あいつは姐さんどうこうよりも、組の行く末よりも、雪ちゃんの心配していたんだがな」

そうさそうさ、と一同がわっと笑う。

「そりゃ、あいつは通常営業だわっ！」

沸く男衆の中であって、黒原は秋口にもかかわらずまだ強い日差しを見詰めて、小さく吐き捨てる。

「しかし、反対に賛成と、色々あるが、師匠あたりは本当のところ、どう思っ
てんのかねえ」

そして、数日が過ぎるのに任せる獅士堂の面々。

やがて、長月も後半にかかる頃には、春花たちと辰ノ神側は数度にわたり顔を合わせ、挙式の段取りをほぼ済ませていた。

「今年ももう、見頃も終わりねえ」

春花は、庭の池に浮かぶ蓮の華の花卉を水面から掬い、そう穏やかに言った。

「……………そうだな」

隣にいるのは白峰だ。着物の裾を品よくまとめてしゃがむ春花の背中を見遣る。その視線に気づき、ん？ と春花が振り向いた。

「何を視ているのかしら？ 白峰さんてば」

「いや、そうしていると、娘時分とあまり変わらん気もしてな……おかしな気分だ」

「それって、私がまだまだ若いってこと？ いやあ、恐縮ねえ。ともすれば三十路なのに」

ふん、と白峰は腕を組む。

「そういう茶かすところ、巫山戯るところも変わらん。だからいつも、自覚をもてと言っている」

放っておけばお説教になるな、と春花はふうと息をついて立ち上がる。そして、自分よりも背丈のある壮年の男に顔を近づける。

「よく視てきた風よね。改まってなにかと思ったら、もしかしてマリッジブルーというヤツかしら。当事者以外でも気が滅入ってくるって、あるのかしらね。それともノスタルジィ？」

「重ねてになるが、お前はな、昔っからずっと言ってきたが、自分の立場を弁えろ。今の場合は、自分の影響力とも言えるモノを考えろ」

「そう？ でも、そんな堅苦しいのに囚われた私って、白峰さん、近くで視ていたかったかしら？」

「む……………」

「でもでも、案外嫁入りすると、そういう面が出てくるのかな？ よく分からないけれど」

「そうだな、お前がおちつくところなど、想像がでкин」

大儀そうに溜息を吐いて、白峰は腰に手を当てる。

「しかし、互いに歳をとったものだな、春花よ」

「ぷ。なにそれ。やっぱり感傷的になってるんじゃない」

ま、やめてとは言わないけれど、と春花は胸を反らす。

まだ反対の火はちらついているが、それでもここまで話がとんとん拍子に運

んだのも、過半数が反対以外だったからだろう。新郎側への不安と春花への執着、そして今回の大きな催し事を機に進んでいくかもしれない方向への期待と、春花への祝福。その根っこにある春花の器量への信頼。これらが秤に載ったうえで、よいバランスのうえに成り立つ現状でありながら、しかし春花は兄弟子に軽く礼を言う。

「四聖の意見をまとめてくれて、ありがとう、白峰さん。やっぱり、こういう時には白峰さんが一番頼りになるわ」

「ふん、昔から世話を焼かされてばかりだ」

「あはは。まあ、色々あったわね」

蓮の花弁を指で弄び、春花は遠い目をする。白峰は言う。

「しかし、それでまた結婚話か？ お前は懲りたものだと思っていたが」

「もう、何年前の話よっ 私が頭梁になる直前の話じゃない。忘れました〜」

「忘れたか。まあ、それならそれでよいが」

「でも、その時に白峰さんに優しくしてもらったことは、ちゃんと覚えてるわよ」

突然の春花のニヤついた顔の発言に、白峰は盛大にむせこんだ。

「.....おまつ.....、それは、言わんという約束だろう.....」

「なんだかんだで、その時くらいよね。白峰さんとあれこれしたのって。.....その後ちゃっかり後添えもらっているし」

白峰の狼狽ぶりと、本来するべきではない話を持ち出していることにも春花は悪びれることなく、横目に白峰を視る。

「それは.....、んんっ、お前な、今さらそれをどういうつもりで言っている...」

しどろもどろの白峰は、やはりそこに僅かながらの負い目を感じていたのだろうか.....産めない体となった女性を愛しきれず、普通な結婚を別にした自分に。

しかし、春花はそんな心情も、自分の昔の事柄ながら、さほど気にした風もなく――本当に昔のことと、忘れたと言える事柄になったかのように――楽し

さを存分に含んだ顔で言う。

「もう。何を深刻になっているのよ。そこで私が本当に確執を抱えていたら、本邸には息子さんに居てもらったでしょうに。白峰のシマを息子さんに任せて、あなたにここに居てもらって、私は助かったし……それに、楽しかったわよ」

「ふん……、そうか」

悪戯っ気を露わにして、顔を覗き込むようにしてくる春花から、逃れるように半身を横に向く白峰。

婚礼の話が持ちあがって後、春花は広間の夕餉の席でも落ちついておられず、稽古の間もひっぱりだこだった。そして、昼間の空いた時間は、この約一か月は挙式の相談に境界線上まで先方を訪ねていくという、忙しく気の休まらない日々を送っていた。

白峰の方も、日々の稽古のかたわら、組内での不満と不安の声に応えて僕たちの心のバランスをとり、そのうえで日々の任務の采配、実地と出向き、加えて他の四聖間の話のとりまとめも行っていた。

二人はこの間、ひとつ大きな催し事が加わっただけだが、多忙だった。

それでも、この縁談をよい方向に進行させようと白峰が動いていたのは、彼が春花の結婚に賛成の気持ちと立場をもったからに他ならない。

最初は、事後承諾やその結婚相手に当惑し、受け入れがたいと怒った。しかし、春花の様子が安っぽい恋に熱をあげたモノではないと、よくよく話をしてわかったし、実際に辰ノ神側に出向いて相手側と話をしてみて、白峰自身も高杉湊奈人の人物に信用を感じられた。

だから、だったら……今回はうまくやらせてやりたい、という思いに白峰はなった。

雪絵という娘を得て満足だろう、という程に、春花の自由闊達さを縛れるとは思っていない。むしろ、望ならば春花の幸せをよりよい方向で叶えてやりたい。

白峰は、春花の幸せを願う一人だった。

「しかし……、結婚なあ……。多くの偉人たちが口ぐちに言っとるし、儂など

も思うが、していいものでもないぞ、一面で」

「何か問題発言にも聴こえるけれど.....、でもそれって、しないのも良くないって、多くの傑出した人物たちは口にしていた筈でしょう」

「うむ、まあな。しかし、儂らのような生業だと.....いや、それは堅気も同じか。所帯を持って護るモノが増えるというのは、身が重くなることだということだ」

「ふ～ん。やっぱりそうなるかしらねえ、私も。白峰さんさ、一時期からやけに戦い方が“生き残ること”に傾いているようになってしまったし、弟子にも勝つことよりも生き抜く術としての心得をよく説いているし。昔はもっと雑だったわよね」

まあな、と白峰は何度か頷く。さながら、そうした教えで生き残っている弟子の数を数えているかのようだ。

「それに、実際それでこの歳まで生き延びてきたようなものだが.....まあ、儂は生き汚いのよ」

「護る者たちのために、自分が死ぬわけにはいかないから、か。だからそういう兵法を強く模索し始めたんでしょね」

うっすらと笑う春花に、白峰は顎を掻き、身を屈め池に顔を出す。そして、花卉の散った花托を見遣る。

「散ってしまっては意味がない。それだけとは言わんが、咲き、生きてこそその命でもある」

そんなことを言う白峰に、春花は厳かに臉を伏せて言った。

「けれど、この蓮の華のように、後に遺るモノもある。ウテナとなるとも、華の畢りであっても、後に続く者たちに何かを遺せれば、それはそれで価値や意義があると思えるわ」

「.....智り、悟ったことが、次代の華を咲かす、か.....」

「ええ。ウテナに伏すともね」

そこで春花は、身をぐるりと回して見せて、白峰に笑いかけた。砂糖菓子が舌の上でとろけるような笑みだった。

「ねえ、白峰さん。久しぶりに私と一本やりましょうか？」

「なッ?! お前、一本って……っ 馬鹿、よ、嫁入り前だろう!!」

「えー、一本って、木刀試合の一本に決まってるのに、なに、白峰さん。やーらーしいーいいーっことでも考えたの〜？」

「ぐっ……、んな訳あるかいッ」

白峰はそう言うと、血を巡らせられた顔をぷいと向け、踵を返して歩き出した。何だか昔に戻った気がして、顔を平静に保つのに難儀した。

そんな先輩武俠を――長く様々な時を共にしてきた男を、春花は涙袋を深めて見遣る。

そして、その男に告げた。

「長生きしてよね、白峰さん。そして、雪絵たちを支えてやってあげて」

その時、白峰は気付いてもいい筈だった。先のことを何か頼む時の春花は、大概の場合何かを『視ている』からそう言っているのだと。しかし、白峰はこの時、そのことに考えが及ぶことはなく、いつも通りに午後の稽古に向かったのだった。

……続く。